

## あの頃の西本三十二先生と教育研究所



故 西本三十二先生

中野 照海

わたくしは、1956年に国際基督教大学教育研究所に就職し、助手として、後に講師、助教授として、西本先生とご一緒させて頂きました。さらに正確に言えば、京都大学の学生のとて、芋阪先生に連れて頂いて、先生が主宰されていた第2回視聴覚教育研究協議会に参加しましたので、西本先生にお目にかかったのは、1955年の夏ということになります。先生は1967年に退職されましたので、その期間は12年でした。もちろん、その後も視聴覚・放送教育学会での期間を入れますと、ご指導いただいた期間は、お亡くなりになるまでの、30年以上ということになります。

創設期の教育研究所は、大学本館の1階東側にありました。「大学本館」といっても、寮と食堂を除くと、建物はこれしかありませんので、図書館は2階の西側、「自然科学科」は1階の西側、売店は1階の東側にありました。学長室は2階の東側の角、それに続いて会議室、教務課、学生課などがあり、3階の東側に社会科学科と人文科学科が、西側に「英語学科」がありました。

建物の規模からいえば、とても小さな大学でした。京都大学の修士を終えたばかりで、縁あってここに就職したのですが、建物の内部の清潔さに驚きました。

先生方の中には、外国の方が目立ちました。学務担当副学長がトロイヤー先生、財務担当がハケット氏、教養学部長クライダー先生でしたから、アメリカの大学に來た思いがしました。建物内部のアナウンスメントも、日英両語が使われていました。ほとんどの場合、英語の方が先でした。「May I have your attenntion please」で始まります。

初代の教育研究所長は、日高第四郎先生でした。研究所のスタッフ・ミーティングでは、日高先生が英語で会を進めておられました。明治時代の学習院で、乃木校長に教わった古武士のような先生が、英語をお話になっているのには驚きました。そして、お上手でもありました。小島先生、秋田先生、長先生、守谷先生、高木先生、讃岐先生、岡部先生、ウェンガー先生、そして西本先生などの先生方が、所員でいらっしゃいました。今では、当時の先生のうちで、讃岐先生だけが、現役の所員でいらっしゃいます。こんなことを思い出していると、私は讃岐先生に次いで、研究所では古いことに気がつきました。

西本先生がご退職なさってからでも、もう20年以上になります。1967年にお辞めになって、翌年『ICU教育研究』第13巻は、西本先生に捧げられています。それに当時までの詳しいご経歴やご業績が載っておりますので、先生の、いわば「おおやけ」の部分は、この文章の終りのところに、まとめさせて頂きます。ここでは、むしろ、ICUにご勤務の頃に限り、しかも西本先生の身近にまつわることの断片を記して、思い出に残しておきたいと思います。これは、身近にいた者の先生への鎮魂のことばでもあります。

## 能書家

先生は字がお上手であった。日高第四郎先生は、御尊父が宮中の書道の先生でいらっしゃったこともあって、実に見事な字を書かれていた。当時、管

財課長のお仕事をされていた細木盛枝氏も達筆だった。ある時、西本先生のご用で、書類を持って細木さんに会いに行くと、「君とこのボスは、いい字を書くね」と言うので、同意すると、「日高さんの字も、いい字だよ」という。それぞれの先生方の字に関心が向くようになったのは、それ以来かもしれない。

明治生まれの先輩の、書道に対する教養の深さを知り、このお3人は「ICUの三筆だ」と思っていた。このうちで、筆の字はともかくとして、ペン字であれば、西本先生の字が、もっとも美しいと思った。王羲之風の本格的な草書であった。若い頃、練習なされた字である。英字も流暢な草書？で書かれていました。原稿は、読みやすい、くせのない字でいつも書かれていた。

達筆に過ぎて、たまに読めない文字もあった。邦字のうまい人は、英字もうまい、という見本のような、どちらも見事な書体であった。

私の方は、ていねいに書いても、さまにならない字の原稿を、西本先生にお持ちする度に、冷や汗をかいた。「君は前半は、まだまじだが、後半は乱れるね」といわれる。その通りであった。

## きれい好き

乱雑なことを、極端に嫌われた。机の上に、ほこりがあってはならない。本棚にも、窓の棧にも駄目である。まして、タバコの灰が、散らばっているのは論外である。蠅が飛ぶのも、がまんがならない。教室には、蠅叩きがいつもあった。ときに、蠅の侵入があると、真剣に蠅叩きで追いかけておられる姿を、幾度となく見た。

同僚が、朝ひげを剃らないで研究室に来ると「ひげぐらい剃りたまえ」と言われた。洋服も、やや保守的で、清潔なものを好まれた。妙な格好をしていると、じろりっと、先生の一瞥があった。

## 早起き

朝は、いつも、お早かった。毎日、朝風呂に入っておられた。低血圧のた

めだとのことである。大学構内にお住まいだったとはいえ、研究室におみえになるのは、だれよりも早かった。助手も、8時30分に間に合うように、自転車を飛ばした。その頃、武蔵境から大学に来る道は、武蔵野市の部分は未舗装であった。境の方から自転車を走らせると、鷄明幼稚園の手前までは、じゃり道だった。時に猛スピードで走っていて、石ころをパトロールカーにはじき飛ばして、首をすくめた覚えがある。 たまに助手よりも遅いときは、ご病気か、学外のお仕事でお休みのときだけだった。朝の内に、大学の仕事を終えられて、午後は学外にお出かけというのが、通常であった。時に、夕方や、夜に研究室にお見えになって、貯まった仕事をこなしておられた。

## ビニールの靴

皮製でない、ビニールの靴が現れたとき、これぞ究極の靴と重宝されていた。しかし、今の合成皮革のものからは、想像できないものであった。

「君、これでアメリカにも行って来たのだから。ホテルでボーイが、靴を磨きましようか言うものだから、濡れたティッシュでひとぬぐいしたら、目をまるくしていた」と、楽しそうに話しておられた。

「雨の時も、便利でいいしね」

「なによりも軽くていいよ」

その後、出版社を訪ねた時、編集者が「先日、先生がお見えになったとき、ビニールの靴の効用を話しておられた」というのを聞いた。

やや、機械音痴でいらっじゃったが、新しいものには、そうじて興味を示された。携帯用トランジスタ・ラジオの未だ珍しい頃、お宅とオフィスの行き来に、ラジオをお持ちであった。そして、オフィスでもラジオを聴いておられた。多分、学校放送番組を聴いておられたのであろう。

当時、ナイロンのシャツも愛用されていた。洗濯に手間がかからないし、アイロンの心配もないものだから。

そんな合理主義を通しておられた。

### ちょこ半杯で動悸

酒は、ほとんどというより、まったく嗜まれなかった。体質的に駄目だといわれた。

それでも、戦争末期の札幌放送局長としては、「北の守り」のために、毎週、軍関係者との会合に出なければならなかった。連絡会が終ると宴会になるので、少しは飲めるようにと練習をされたが、その効果は現れなかったと言われる。

当時、単身赴任で、札幌グランドホテルにご滞在であったが、毎晩お休み前に、ちょこに半分のウィスキーを、目をつぶってお飲みになったという。しかし、ちょこ半杯で、動悸がしたというお話である。

### たばこより金平糖

たばこは、若い頃、短期間だけ吸っていた、と話しておられた。多分、アメリカご留学の頃であろう。風の強いある日、たばこの灰が目に入った。それ以来、たばこには縁がないといわれる。

当時の研究室の若者三人は、すべてたばこ吸いだった。前任の、杉山さん、上林さんがどうだったかは知らないが、同僚の栗原さん（現関東学院大学）と技術を担当していた伊藤さんは、私を含めて、たばこを吸った。部屋は、いつも煙がもうもうとしていた。ウェンガー先生の後任で、おみえになったテイラー先生は、パイプ党であったが、それでも、部屋にお見えになると、煙を掻き分け、水中を泳ぐ真似をなさっていた。

西本先生が仕事のことで部屋にお見えになると、「君たち、一日に何本吸うかね。体に悪いだろう」と、早々と退散された。われわれが、別に意識して、煙もうもうとしていたわけではなかった。しかし、廊下を隔てた教授室と、研究室とをつなぐインターホンが付いた時、煙は効力を失った。

先生は、日が寂しいとき、ポケットから金平糖を出して、なめておられた。

## 焼きものと民芸家具

大学内のお宅でも、後の吉祥寺のお宅でも、家具と食器は、民芸調ではない、ほんものの民芸であった。食器は、奈良の赤膚焼きが中心で、家具は鳥取へ特注したもので、重みのあるものだった。椅子の肘かけの部分は、厚手の板で、巾が広がった。これに、茶碗や、小さなお皿であれば、置くことができた。ここにも、合理主義があった。

若い頃、外国で過ごされた方には、民芸ファンが多い。国際基督教大学の初代の学長、湯浅八郎先生も、山下清を世に出した式場隆三郎院長も、民芸の有名なコレクターであった。湯浅先生の収集を中心にした博物館が、現在ICU内にある『湯浅記念館』である。

式場さんご存命の頃、市川の式場病院にお供して、ばら園を見に行った。むしろ本命は、ばらよりも園内にある式場邸にあったと思われる。ばら園の方は、そこそこにして、居間の民芸家具、焼き物を見せていただいた。

後に、「近頃の民芸は、民芸貴族になった」と言われたのには、門外漢も同感であった。

## 音楽

なにかのお祝の会を計画していたとき、音楽を入れることをお話した。バンドを入れてもよいかとお尋ねすると、「あまりやくざなことはするな」と言われた。おそらく、日頃のおこないから、ジャズバンドか、なにかと思われたのであろう。そこで、音楽の話はおしまい。このときは、知合の上野のピアノの先生に頼んで、ピアノトリオかクインテットのつもりであった。

先生の「告別の会」のために、丸一日、ヴィバルディ、テレマン、バッハ、ヘンデル、……ドヴォルザーク、メシアンなど、当たりをつけて「らしいもの」を、かたっぱしから聴いた。はては、サティまで聴いた。明るい「別れ」は相応しくないし、まして、恋人との「告別」では具合が悪い。宗教色の強いのも避けた。

CDを聴きながら、なん度目かの『誰がために鐘はなる』を読んだ。後で、

考えてみると、ひとりだけの「告別の会」だったのかもしれない。

迷いに迷ったが、結局のところ、ベートーヴェンの「葬送」に落ち着いた。これは、だんじて、「やくざな」音楽ではない。先生には「英雄」こそが相応しい、そんな確信があった。この確信は、日毎に強まってきている。

## 故 西本三十二（にしもと みとじ）先生の略歴と業績

## 〔略歴〕

明治32年 1月2日大阪府に生まれる  
 大正14年 コロンビア大学大学院卒業  
 昭和3年 奈良女子高等師範学校教授  
 昭和8年 日本放送協会大阪中央放送局社会教育課長・教養課長  
 昭和13年 日本放送協会編成部長  
 昭和16年 同教養部長  
 昭和18年 同理事・札幌中央放送局長  
 昭和22年 成蹊大学教授  
 昭和23年 日本放送協会設立・代表理事  
 昭和27年 財団法人日本放送協会理事長  
 昭和28年 国際基督教大学教授  
 昭和42年 帝塚山学院大学学長・同学院長  
 昭和50年 同大学名誉学長  
 昭和56年 日本放送教育協会名誉会長  
 昭和63年 1月9日 逝去

国際基督教大学名誉教授・日本放送教育学会会長・日本通信教育学会名誉会長・日本視聴覚教育学会顧問・松下視聴覚教育研究財団常務理事・財団法人AVCC理事

## 〔主な著書・編書〕

大正15年 秀才の心理とその教育  
 昭和6年 人間学習の指導原理  
 昭和10年 学校放送の理論と実際  
 昭和18年 教育の諸問題  
 昭和23年 学習論—人間性の開発—  
 昭和25年 放送教育精鋭（編著）  
 昭和28年 放送教育の展望  
 昭和35年 テレビ教育論  
 昭和38年 テレビ教育展望  
 昭和39年 教育工学  
 昭和40年 視聴覚教育50講（編著）  
 昭和41年 教育の近代化と放送教育  
 昭和46年 放送教育新論  
 昭和51年 放送50年外史

## 〔訳書〕

昭和23年 新教育の創造（W. H. キルパトリック）  
 昭和30年 デールの視聴覚教育（E. デール）ほか

## 〔受賞〕

昭和32年 放送文化賞  
 昭和34年 藍綬褒賞  
 昭和38年 前島賞  
 昭和44年 マグサイサイ賞  
 昭和45年 放送教育功労賞（米国放送事業者会議）